

## 教員活動状況報告書

提出日：令和 5 年 3 月 22 日  
 所 属： 獣医学部 獣医学科  
 氏 名： 永根 大幹 職位： 講師  
 役 職：

## I ティーチング・ポートフォリオ

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲）

（教育活動について何をやっているのか：役職担当・主要担当科目リスト（必修，選択）（受講者数）（学部向け，大学院向け）（學理データ活用）

教師として何に責任を負っているかを明確にし，自分が担当している授業科目に関して数行で説明する。（分量の目安：2～5行（80字～200字）（科目表以外））

※分量（字数）はあくまで目安ですので，超えても構いません。内容を優先して下さい。（以下同じ）

- 獣医遺伝学  
生物学、分子生物学、生化学の知識を基に詳細な遺伝学について習熟する。ゲノムの定義やエピジェネティクスなどコアカリキュラムを超えた最新の科学的な知見を得る。
- 獣医生化学実習  
本科目において、生化学的な実験手法を学ぶだけではなく、実験器具の使用法、機器の基本的取扱、グラフの作成方法、化学物質の適切な取扱方法の習得を目指している。
- 獣医学特論 I&II  
研究室での少数でのゼミを通し、研究における PDCA サイクルの実践法を学ぶ。また、学会発表などアウトプットの準備を行う。
- 卒業論文  
獣医学特論での実践の積み重ねをまとめ、卒業論文を作成する。卒業論文の内容は外部発表を義務とする。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
獣医遺伝学	獣医学科	必修	2年次	約140名
獣医生化学実習	獣医学科	必修	2年次	約140名
獣医学特論 I	獣医学科	必修	5年次	4名
獣医学特論 II	獣医学科	必修	6年次	3名
卒業論文	獣医学科	必修	6年次	3名

## 2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

1. で説明した教育面での責任を基にしながら自分の教育理念に基づいて自分の教育アプローチについてまとめる。（自分の教育アプローチの説明：なぜやっているのか，自らの信

念、価値、目指すもの)

(分量の目安：8～12行(320字～480字))

2年次と5-6年次の2学年を担当しており、それぞれ異なった目的を持つ。2年次では、初期教育であるためボトムアップを目的としている。獣医遺伝学により最新の生物学的知見を伝え、今後の研究室への配属含め、研究レベルから教科書レベルまでの知見の蓄積であることを学ぶ。獣医学・生物学はただ一方的に学ぶのではなく、大学での卒論や研究の積み重ねが未来の知識につながっていくことを感じて貰う。また生化学実習では、今後の実習における基礎的なトレーニングを兼ねている。この両科目によって、獣医師養成課程における基礎的なスタンスを作ってもらう。

一方で、5-6年次ではトップアップを目的としている。研究室における実際の基礎研究に従事することで、仮説の設定から検証、外部発表までの一連の流れを体験して貰う。また、学会発表や論文発表を通して、進路に関わらずアウトプットの基礎的なトレーニングを実施する。

### 3. 教育の方法 (理念を実現するための考え方, 方法)

教育の目的と目標 (これまでの教育経験においていつも行っていること。重要視していること。自分の教育を特徴づける方法) (分量の目安：15～24行(600字～960字))

教育の目標は、科学者たる獣医師の養成である。獣医学科は国家試験対策が重視される傾向にある。大学として国家試験合格率は重要ではあるが、個々の学生と向き合ったとき、全国平均 85%以上が合格する試験の合否は実質的に意味の無いものであると考えている。例えば、全国で年間 1,000 人程度の獣医学生が国家資格をもって社会にでていくが、偏差値的な価値を考えると本学含む私立大学の卒業生は下位 50%に位置する。そのため、卒業論文などによって学術的価値を付加出来ない場合、上位 10%の獣医師を社会に輩出することは叶わない。そのため“ただ国家試験に合格しただけの 6 年生”を輩出するのではなく、一定の科学的素養をもつ獣医師の育成を目指している。

#### アクティブラーニングについての取組

獣医学特論および卒業研究において学会発表によるアウトプットを義務としている。

#### ICT の教育への活用

學理を活用し、完全なペーパーレス授業・実習・ゼミを実施している。

### 4. 教育方法の改善の取組 (授業改善の活動) (分量の目安：15～24行(600字～960字))

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

(①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください)

#### ①教育 (授業, 実習) の創意工夫 (A～C)

B (実施しているが十分でない) コロナウイルスの影響が大きい。

②学生 の理解度 の把握 (A~C)

A (十分実施している) 課題により理解度を把握している。

③学生 の自学自習を促すための工夫 (A~C)

A (十分実施している) 課題により十分な自学自習を促している。

④学生 とのコミュニケーション(質問への対応等) (A~C)

A (十分実施している) コロナウイルスの影響を鑑みて丁寧な指導を実施した。

⑤双方向授業への工夫 (A~C)

A (十分実施している) コロナウイルスの影響を鑑みて丁寧な指導を実施した。

※A (十分実施している) B (実施しているが十分でない) C (うまく取り組めていない)

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。(V 学科, M 学科の教員の方のみ記載してください。)

卒業論文・獣医学特論を通し、通年で問題解決型学習を行っている。また他の公的試験(放射線取扱主任者一種、TEIC、バイオインフォマティクス技術者認定試験 など)を受験させることで試験への順応性を高めた。また、生化学研究室所属学生の国家試験合格率は 100%であった。

**5.学生授業評価** (分量の目安：4~7行 (160字~280字))

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

教員に責務のある項目で平均以上の評価であり、継続して実施した。

② ①の結果はどうでしたか。

座学に関しては同様の評価であった。しかし、実習項目はやはりコロナウイルス対応もあり十分な実習ができなかった。また、コロナ禍において学生の志向が変化したため、十分ではない項目があった。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

対面授業・実習へと転換することから、今年度と同様に対応する。

**6.学生の学修成果** (分量の目安：4~7行 (160字~280字))

①学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

(参考となる取組については、学内で共有させていただく予定です。)

研究活動を通し、入学時がピークである“学力”と“思考力”を卒業時まで維持することが重要であると考えている。

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

現6年生は2名が卒業論文のポスター賞を受賞し、また、2名の学生が国際誌に原著論文を投稿し、1報受理された。

**7. 指導力向上のための取組 (FD 研究会参加状況) (分量の目安: 1~2 行 (40 字~80 字))**

FD には時間が許す限り参加しているが、研究遂行上の理由から参加できない場合があったが、今年度は動画配信などがあったため、十分に参加することができた。

**8. 今後の目標 (理念の実現に向かう今後のマイルストーン)**

教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。(分量の目安: 3~6 行 (120 字~240 字))

短期的な目標としては、コロナウイルスの対応で学生教育が脅かされないよう努力したい。

長期的な目標としては、研究が理解できる獣医師の輩出を目指す。

**9. 添付資料 (根拠資料) (※) 資料名のみ**

※資料については非公開扱いのものもありますので、資料名のみを記載してください。

- 授業シラバス
- 授業評価アンケート
- 6 年生の就職状況
- 学科会議資料における卒業論文ポスター賞投票結果
- リサーチマップ (<https://researchmap.jp/masakinagane/>)